

「愛すればこそ」の構造

田鎖数馬

—

谷崎潤一郎の「愛すればこそ」(大10・12「改造」)(原題「愛すればこそ」)、大11・1「中央公論」(原題「墮落」)は三幕からなる戯曲で、谷崎の「最初のベストセラー」(瀬沼茂樹『本の百年史』(昭40・9))と評されるほどに、当時において絶大な人気を博した作品である。墮落した男の妻が美人局をする場面が描かれるなど、過激な内容を備えるために、大正十一年六月の市川左団次一座が本郷座で上演企画を立てたが、当局によって禁止されたということでも知られている。作品の主要な登場人物は、山田礼二、三好数馬、橋本澄子の三人(以下、山田、三好、澄子と略称。)で、彼等の三角関係が織り成す、錯綜した心理が描き出されている。まず、この章では、論に入るための前段階として、三者の人物像と作品の展開を簡略に整理し

ておくこととする。三者の人物像を要約すると以下のようになる。

(イ) 山田は、「犯罪的性質」を生来備えていると評される人物で、澄子に暴力を振るったり、澄子を巻き込んで詐欺事件を企てたり、あるいは澄子に操を売って金を儲けるように仕向けたりする。だが、山田は生まれながらの悪人である故に、そうした行為を行うとはいえず、澄子を「可愛い」と思う気持ちも持っている。それ故、澄子に逃げられることを極端に恐れている。(ロ) 澄子は、もともと結婚の約束を交わしていた三好の下を離れて、悪人である山田の所へ行つた人物である。その理由は、澄子が極めて「情に脆い」「弱い」氣質を持つていて、悪人であるが故に誰からも相手にされない山田が「可哀さう」であると感じられたので、自分が愛してあげなければならぬと考えたからであ

る。しかしながら、一方で三好のことを忘れることもできない。

(ハ)三好は、澄子が自分の所を離れて山田の所へ行つた後も、二人の心は繋がっていると考える人物である。というのも、もともと、三好は、澄子が山田の所へ行ったのは、自分が山田に澄子を譲つたためであると考えているからである。なぜ譲ろうとしたのかといえば、まず、澄子が悪人である山田が「可哀さう」である、愛してあげなければならぬ(実際には愛してはいないけれども)、救つてあげなければならぬという気持ちを持った時、その優しく「美しい性質を完うさせて上げたい」と思つたからである。また、無理に澄子を山田から引き離すようなことをすると、澄子の「美しい性質」を壊すことになり、自分の澄子に対する愛が消えてしまふと思われたからでもある。澄子を山田に譲るという行為は、自分にとつても澄子にとつても苦しく悲しい決断ではあるが、「可哀さう」な山田を救うために、自己犠牲的な行為を行い、二人でお互いに苦しみや悲しみを共有した時に、真の愛は成り立ち、やがて二人の愛は「離れて居られないほど」「深められて」いくと考えている。そして、そうした自分の気持ちを澄子はよく理解しているが故に、山田

の所へ行つたのであると捉えている。それ故、三好は、澄子が苦しみながらも山田を愛そうと努力するのは、自分の気持ちを酌んでいたからである、自分を愛していたからである、と思つている。

こうした三者の独特の恋愛観が微妙な関係を形作り、それが危うい均衡を保ちつつ作品は展開していく。だが、最後に、山田に隠れて澄子と関係を持った三好が、山田にその罪を謝罪すると同時に、澄子を自分の所に返して欲しいと頼むことで事態は急転する。実は、澄子は悪いと思いつながらも、山田に命ぜられて三好から金を巻き上げるために、三好と関係を持っていたに過ぎなかつたということが判明し、三好は失望して澄子と山田の所から姿を消す。

山田も三好も澄子も、各々尋常とはいえない難い特異な性質を持つていて、彼等の心理の絡み合いを解きほぐすのはなかなか困難である。とりわけ、澄子と三好の心理や行為、あるいは二人の関係については、未だはつきりとした点も多い。実際、先行研究でもその点に関して、見解が統一されているわけではない。その意味で、先行研究と照合しながら、澄子と三好の人物像や、二人の関係を把握していくということがさしあたり求められる。

この作品において、澄子は山田を一心に愛さなければならぬと考えているが、同時に、三好のことに心引かれている。この澄子の心理を一体どのように理解すればよいのだろうか。その点に関して、これまで、(一)澄子は山田を愛そうと努めてはいたが、内心では三好のことを愛し続けていたという見解、(二)三好に心引かれるという澄子の一面には重きを置かず、澄子の山田に対する愛のみを強調するという見解、(三)澄子の心理の内実は不分明であるという見解、が出されている。

(一)の見解としては、永栄啓伸『谷崎潤一郎論——伏流する物語』(平4・6)「(千代)を考える——谷崎文学と小田原事件——」、和田康一郎「愛すればこそ」を讀み解くために——登場人物像に関するノート——」(平5・11「稿本近代文学」)を挙げることができる。永栄氏は、澄子は「三好に背き(あるいは自己に背き)悪人の山田の虐待に耐え忍びながら、山田を愛してゆこうと努力」していたと捉えている。三好を愛する自らの心に背き、山田を愛そうと努力していたという解釈である。和田氏も「明らかに澄子の真の愛は、三好にあるのだ。山田への憐みから、山田を愛そうと意志する自らの氣質を捨て去れないだけなのである。」と指摘し、同様の解釈を示している。(二)

の見解としては、野村尚吾『谷崎潤一郎の作品』(昭49・11)の「夫婦における愛の構造」を挙げることができる。野村氏は、山田に対する澄子の愛を踏まえて、澄子は「徹底した破倫の中に求道的な気持ちを見失わずにいる献身的な女性で」あり、「あらゆる汚辱の中に清けに咲く花を思わすものがある。」と指摘するものの、澄子が三好に心引かれているという点については全く言及していない。(三)の見解としては、三上公子「谷崎潤一郎ノート——小田原事件前後——」(昭58・10「目白近代文学」)を挙げることもができる。三上氏は、「セリフを通してしか心理描写されない戯曲体の中では澄子の心理は不透明なままに置かれ、二人の男が彼女の心を同時に傾していることだけが明らかにされている。」と述べている。

しかしながら、これらの三つの見解については、各々に疑問点が存在する。まず、(二)の見解は、山田に尽くそうとする結果、三好を繰り返し裏切る澄子の行為と果たして整合するの、という点で疑問である。(一)の見解の場合、澄子の真の愛は三好にあったということになるので、澄子は愛する三好を裏切つてまでして、愛してもいない山田に尽くそうと努めていたということになる。しかし、いくら山田が「可哀さう」なので、愛してあげなければならぬと思つていたからといって、そうした澄子の行為は、

やはり不自然であると感じられる。澄子は、山田のために三好を裏切る行為を繰り返すが、真に愛するものが三好である時、そうした行為を果たして行うことができるのか疑わしい。(二)の見解は、澄子の山田への愛を強調するあまり、澄子が三好にも心引かれているという点を看過している。その点は作中に明確に示されており、それを等閑に付すことはできない。また、(三)の見解は、山田と三好の二人の男に心引かれる澄子の心理が、「不透明」であるとして片付けられている。確かに、澄子の心理が分かりにくいことは事実であるが、作品の中から、澄子の心理を跡付けて、その意味を分析することは可能であると考えられる。

これらのことから、山田を一心に愛さなければならないと考えているが、同時に、三好のことに心引かれているという澄子の心理は、未だ判然としない。しかしながら、そのことを明らかにすることは、この作品を理解する上で不可欠である。なぜなら、澄子の心理をどう理解するかによって、三好の人物像の意味、澄子と三好との関係もまた変わってくるからである。(八)で示したように、三好は、離れていても自分と澄子との心は繋がっている、二人の愛は続いていると信じる人物である。仮に(一)の見解のように、澄子の真の愛が三好にあったと解するならば、二人

の愛は続いていると信じる三好は、澄子との関係を的確に捉えていたと見ることが出来る。また、(二)の見解のように、澄子が三好にも心引かれているという点に重きを置く必要はないと考えるのであれば、三好の澄子に対する考え方は極めて一方的なものであったことになるはずである。

以上のことから、山田を愛さなければならぬと考える一方で、三好のことに心引かれるという澄子の気持ちはいかなるものであったのか、という点をもう一度検証してみることがある。以下では、その点を検証すると同時に、そのことを通して、三好の人物像、三好と澄子の関係性の把握にも努めていく。そのことによつて、この作品が、山田と三好と澄子の心理を巧みに絡み合わせながら、話の展開が必然的に終幕に向かうように仕組まれた作品、つまり、構造的な話の面白さが志向された作品であったということを示していきたい。

三

澄子は、山田をあれほど一心に愛さなければならぬと考えるにもかかわらず、三好にも心引かれているのは何故であろうか。そのことを検討するために、まず澄子の

氣質がいかなるものであるのか、澄子の行動の基準がどこにあるのか、ということを確認する必要がある。澄子の氣質の中で唯一といってもよい特徴は、澄子が極めて「情に脆い」「弱い」性質を持つという点である。山田を愛さなければならぬと考えた理由も、悪人である山田が「可哀さう」であると感じられたという一点のみにある。

・私はたゞ、山田が普通の人間でないと云ふ事が、世間の誰からも爪弾きをされるやうな悪い人間だと云ふ事が、可哀さうだったのでございます。

・私にしたつて、山田があんな悪人でなければ疾うにあの人を捨て、居たかも知れませんが、悪い人だと思ふ傍から、その悪いのが可哀さうでならなくなつて、知らず識らず斯うなつてしまひましたの。

「可哀さう」であるから愛してあげなければならぬ、という心理はやや特異なものであるのかも知れないが、この点こそが澄子に根ざした特有の氣質であり、彼女の人物像の核となっている。従つて、愛に関する澄子の言動は、「可哀さう」という言葉に代表される憐憫の感情と切り離して考えることはできない。澄子の「可哀さう」という感情を手掛かりにして、澄子の言動を検証してみる。

澄子が婚約者であつた三好の下を離れて、山田の所へ行つた理由は、今述べた通り、悪人である山田が「可哀さう」

であるから、自分が愛してあげなければならぬと考えたからである。その後、山田の所へ行つた澄子は、山田の数々の虐待を忍びながら、時に見せる山田の弱さに心を動かされ、一心に山田を愛そうと努めてきた。しかし、山田に操を売つて金を稼ぐように命じられたことに失望し、山田の所から、三好のいる橋本家へ逃げ込む。そして、その場で山田と別れたいという決意を三好に伝える。その時、三好から、山田が「可哀さう」であるから山田を愛してやらなければならぬと考えた嘗ての気持ちは、もう捨ててしまつたのか、と尋ねられた澄子は、次のように答えている。

可哀さうなのは山田よりも私でございます、どうか私を可哀さうだと思つて下さいまし、(中略)母には何も申しませんでしただけ、山田は私に操を売つて金を儲けると申すのでございます。(中略)数馬さん、何卒私を可哀さうだと思つて下さいまし、

澄子は、今までは山田が「可哀さう」であるから、山田を愛してやらなければならぬと考えていた。しかし、ここに至つて、山田が「可哀さう」であるとすると感情は薄れ、自分こそが「可哀さう」で惨めな存在であると感じて、三好に憐れみを請うようになつた。自分の置かれた状況の苦しさを痛感する気持ちは、山田への憐憫の情を超えた時、自分を愛してもらいたい、救ってもらいたいという欲求が

澄子の中に湧き上がってきたのである。

従つて、以上のことから、澄子の氣質の特徴として、①澄子は「可哀さう」であると感じた人物を愛さなければならぬと考えるという点、②しかし、その人物よりも自分が「可哀さう」であると感ぜられた時、その人物を愛さなければならぬという気持ちは、自分こそが救われたいという気持ちに押し流されるという点、を挙げることができる。この二点が澄子の行動の基準となつてゐる。

そのことは、さらに続く澄子の行動においても確かめられる。三好の下に逃げ込んだ澄子は、三好と結婚しようとして決意する。しかし、その時、山田が澄子の後を追いかけてきて、涙ながらに澄子を返して欲しいと訴える。だが、詐欺事件を働いていた山田は、その場に來合させた刑事に捕らえられる。それを見た澄子は再び翻意して、山田の所に戻ることを決める。その時の気持ちを澄子は次のように述べてゐる。

・でも、何だか山田が可哀さうでなりませんの、——
あの人はほんとに独りぼつちでございます、そしてみんなに欺されたのでございます。

・私は今日まで山田の妻ではなかつたのです。今日からほんたうに山田の妻になつてやらなけりやなりません、どうか悪く思はないで（中略）山田は独りぼつち

なのです、誰も今まで山田の事を思つてやる人はなかつたんです、あなた（論者注——三好）の事は思つて居る者がありませんけれども、

ここで澄子は、山田の涙ながらに訴える哀れな姿、刑事に捕らえられる惨めな姿、を目の当たりにして、自分や三好よりも、山田こそが真に「可哀さう」な人間であるという感情を再び持つようになる。そのため、澄子は、やはり山田を愛してやらなければならぬと考えるようになり、山田の所へ戻る決意をする。澄子の氣質の①で示した通り、澄子が愛してやらなければならぬと考える対象は、誰が一番「可哀さう」であると感じられるのか、ということによつて決められてゐると分かる。

澄子が三好の下を離れて山田の所へ行つた行為、山田の下から三好の所へ戻つた行為、再び三好の下を去つて山田の所に向かつた行為、は全て澄子の「可哀さう」という感情に基づいてなされてゐる。「可哀さう」とあるという感情に、これほどまでに支配される澄子の氣質は、普通に考えれば奇異なものであるが、この点こそが澄子の核心的な性格である。そうである以上、その氣質によるこの感情や行為が、山田や自分に関してだけのものであるとは思えない。三好に対する言動も、全てこうした澄子の氣質に基づいてなされてゐると見るべきである。そのことを念頭

に置いて、続いて、三好に引かれる澄子の気持ちがどのようなものであるのかを考えてみる。

四

三好に引かれる澄子の態度が記された箇所を、作品の中から具体的に見ておこう。まず、三好と澄子の以下のようなやりとりから、三好に引かれる澄子の気持ちを窺うことができる。三好の、「離れて居ると云ふ事が少しもお互いを忘れさせる元にはならないで、却つてそれが二人の心をだん／＼近く惹き寄せてしまふ。あなたも僕もそれをハツキリ感じて居るんです、——ねえ、澄子さん、あなたはさうでないと仰つしやるでせうか？」という言葉を受けて、澄子は次のように答えている。

数馬さん、私あなたに、何も彼も隠す事は出来ないの
でございませう、うそをつく事は出来ないのございませう、けれどもそれを云ひましては、山田に済まないと存じますから、——
(一)

これは、再び三好の下を去つた澄子が、久しぶりに三好と出会つた時に会話を交わした場面である。確かに、こうした場面からは、離れた後でも、三好のことを忘れることができないという澄子の気持ちを知ることができる。

では、こうした澄子の気持ちは何に由来するのであろうか。この場面における澄子の発言の真相は、恐らく、この場面の直後、三好が去つた後の山田と澄子との次のようなやりとりの中から窺うことができる。

山田 (前略) 三好の奴あよつぱど変な野郎だな、女

みたいにめそめそしやがつて、執念深くいつ迄でも絡み着いて居やがる。己アあんな奴は大嫌ひだ。

澄子 だつて、あの人だつて可哀さうだとは思はなくつて?

山田 そりや、お前は可哀さうだと思ふだらうさ、お前は義理があるだらうから。

澄子 いやよ、その話は止して頂戴。

山田 だが己は彼奴に義理なんか一つもねえんだ、彼奴よりも己の方がよつぱど可哀さうなんだ。

澄子 …… (何事が気が咎めたらしく、頂垂れて沈黙する)

山田 ねえ、さうだらう、それはお前にも分つて居るだらう。

澄子 …… (微かにうなづく)

山田 それが分つて居てくれりやあ、己は何も文句はねえのさ、——な、大丈夫だらうな、確かに分つて居るんだらうな。

澄子 そりやあ分つて居ますけれど、……

山田 居ますけれど何んだと云ふんだ？

澄子 ……たゞね、数馬さんがあゝして、いつ迄もあんな風にして居るのが、気の毒でならないの。今夜にしても会わない方がいゝと思つたんだけど、顔を見たら何だか気の毒になつちまつて、帰つてくれなんて云ふ事は、とてもあたしには云へなくなつてしまつたわ。

(Ⅰ)の場面の少し後には、「とても私、あなた(論者注——三好)に会はずには居られないのでございます」、「私一人が悪い為めにあなた(論者注——三好)にも山田にも、濟まないやうな事になるのでございます。」と、(Ⅱ)の場面の少し後には、「訪ねて来られりややつぱり(論者注——三好)に会はずに居られない」、「私が悪いんです、……あなた(論者注——山田)にも数馬さんにも濟まないんです。」と、澄子は述べていて、両者の表現は近似している。それ故、(Ⅰ)と(Ⅱ)の場面における澄子の感情が近いものであったと分かる。(Ⅰ)に窺える澄子の心境の背景には、(Ⅱ)に見られる澄子の感情が存在していたと考えられる。

さて、(Ⅱ)の場面を見てみると、澄子は、三好を裏切つてしまつたことで、三好に「義理」があると感じている。

そして、それでもなお三好が、変わらず自分のことを純粋に愛し続けてくれるので、そうした三好の姿を「可哀さう」であると思つている。こうした澄子の感情が、(Ⅰ)の場面における、三好のことを忘れられないという澄子の言葉の背景にあるだろう。澄子は、三好を「可哀さう」であると感じるが故に、三好に対して情が残るのである。先に述べた通り、澄子は「可哀さう」であると感じる人間を、愛してあげなければならぬと考える人物である。その点は、澄子の核となる気質である。澄子が「可哀さう」な境遇にある三好に心が引かれ、それ故に、忘れることができないのは自然なことである。山田も三好も「可哀さう」であると感じられ、双方に心が揺れ動くからこそ「私一人が悪い為めにあなた(論者注——三好)にも山田にも、濟まないやうな事になるのでございます。」という気持ちに澄子は陥る。しかしながら、(Ⅱ)の描写に示されている通り、澄子が山田の存在を、三好よりも「可哀さう」であると感じている点は動かない。この点が動かない以上、澄子は三好に心が引かれはしても、澄子の愛の重心が本質的に三好に傾くことはない。

これは、先に示した澄子の気質の①に基づくものである。澄子が三好のことを忘れられないのは、三好のことが「可哀さう」であると感じられるからである。しかし、その感

情は、三好を愛するという方向へと直ちに結実することはない。なぜなら、澄子にとつて、山田こそが真に「可哀さう」な存在であるという気持ちか動かし難く存在するからである。従つて、既述の場面によつて、澄子の眞の愛は三好にある、ということが示されていたとは考えにくい。澄子の極めて「情に脆い」氣質が、山田を愛さなければならぬという感情を導くと同時に、三好への情を断ち切り難くさせていた。

五

この他にも、三好に引かれる澄子の気持ちが見える場面は作品の中に見受けられる。

山田 (泣いてゐる澄子を尻目にかけてながら) なあに、此奴あ此くらゐな事をしてやつたつていゝんだが、——まあいゝや、後でゆつくり話してやるから、貴様もその積りで考へて置けよ。

秀子 長いわねえ、何をいつ迄云つてゐるのよ。

山田 あはゝゝゝ、飛んだ所を御覧に入れたな、ぢや、出かけようか。

秀子 春ちゃん(論者注——澄子の源氏名)、御免なさい、左様なら、——

澄子 (泣きながらばつたり地上に倒れる) ……数馬さん、……私やつぱりあなたの物なんです、……数馬さん、……

(Ⅲ)

この場面に至る話の展開を確認すると以下のようになる。先に述べた通り、山田に操を売つて金を稼ぐようにいわれた澄子は、失望して一度は三好の所に戻りながら、結局は再び山田の下に赴き、山田にいわれる通り、娼婦として働く。そして、その金を山田に貢ぐようになる。そうした折、娼婦として働く澄子に対して、今度は三好を客としてとるように山田は命じる。三好が誠実に自分のことを愛してくれているということを知り、澄子は、三好に申し訳ないと感じて、山田の言葉にあくまでも抵抗する。しかし、山田は自分のいうことを聞くようにと澄子を殴り続け、その後愛人である秀子と共にその場を後にする。この場面では、山田が澄子を殴り続けた挙句、愛人である秀子とその場を去つていくという、澄子にとつて極めて悲惨な状況が描かれている。「数馬さん、……私やつぱりあなたの物なんです」という言葉に示されているように、この場面からも、澄子が三好に一定の好意を寄せていた、ということを知ることができる。

では、こうした澄子の発言の真意は、どのようなものであったのだろうか。ここで、この(Ⅲ)の場面が、山田に

操を売って金を稼げといわれたことに失望した澄子が、山田の所から三好の所へ逃げ込んだという既述の場面と状況的に類似しているという点に留意したい。先に触れた通り、その際、澄子は、山田を「可哀さう」であると思う気持ちが薄れ、自己憐憫の情が強まることで、三好を頼りたい、三好によって救われたいという気持ちに傾いていく。そこで、澄子は三好に次のように訴えかけている。

私を世間の冷たい人の眼から庇って下さいまし、……今こそ私は、永久にあなたのものでございます、……私を信じてくださいまし、……

(Ⅲ)の「数馬さん、……私やつぱりあなたの物なんです」という言葉と、(Ⅳ)の「今こそ私は、永久にあなたのものでございます」という言葉との類似から、(Ⅲ)と(Ⅳ)における澄子の感情が、近似するものであったと推察することが出来る。従って、(Ⅲ)と(Ⅳ)の場面の状況的な類縁性も考え併せると、(Ⅲ)のような発言がなされたのは、澄子が(Ⅳ)に窺えるような感情に支配されていたからである、と判断される。

さて、(Ⅳ)では、澄子は操を売って金を稼げと山田に命じられた。澄子は、これまで多くの虐待に耐えてきたが、その言葉だけは澄子にとって耐え難いものであった。それ故、澄子は自らの不幸を殊更に痛感し、山田よりも自分こ

そが「可哀さう」で惨めな存在であると意識するようになる。そして、自分のことを愛してくれる三好を頼りたいという欲求が湧き上がってくる。「私は、永久にあなたのものでございます。」という言葉の背景には、こうした澄子の感情が潜んでいる。(Ⅲ)の場面における澄子の感情も恐らくそれと同様のものである。(Ⅲ)では、澄子は、山田に命じられて三好を客としてとるようにいわれた。さらに、それに抵抗すると何度も殴られ、その後、山田が愛人である秀子と共にその場を後にするという光景を目の当たりにさせられた。ここでも、(Ⅳ)と同様に、澄子は山田の非道な仕打ちに耐え切れなくなっていたに違いない。山田を「可哀さう」であるという気持ちは薄れ、自分こそが「可哀さう」で惨めな存在であると痛感することで、自分を愛してくれる三好に縋りたいという気持ちが芽生えていたことと察せられる。「数馬さん、……私やつぱりあなたの物なんです」という言葉は、(Ⅳ)と同じく、虐待に耐えかねた澄子が、自己憐憫の情を強くして、三好を頼りたいと思うようになったために発せられたと解される。これは、先に示した澄子の気質の②に基づくものであると見ることが出来る。

とはいえ、(Ⅲ)に見られる澄子の感情が直ちに三好に対する愛へと直結するわけではない。そのことは(Ⅳ)の

場面の後、山田が「可哀さう」であるという気持ちを取り戻した澄子が、山田のことを愛さなければならぬという感情に即座に傾くことを見ても明らかである。澄子は、山田からの虐待に時に耐えかねた時、憎からず思う三好に頼りたいという気持ちを持つようになる。しかし、山田が「可哀さう」な存在であるという感情が、澄子を最も強く支配するものであるが故に、結局のところ、澄子の愛が本質的に三好に向かうことはない。従って、ここでも、見てきたような場面によって、澄子の眞の愛が三好にあつたと断定することはできない。

ここで、山田のことを愛さなければならぬと考える一方で、三好にも心引かれる澄子の心理はどのようなものであるのかという最初の問いに戻る。それは、(一)の見解のように、澄子が、三好を愛する自らの心に背き、山田を愛そうと努めていたというものではない。それは、第一に、澄子が、「可哀さう」な山田を愛さなければならぬと考える「情に脆い」「弱い」氣質を持つているために、裏切られても純粹に自分のことを愛してくれる三好の姿が「可哀さう」であると感じられて、三好に対しても情が残るということ、第二に、山田から受ける虐待に時に耐えかねた際、自分こそが不幸で「可哀さう」な境遇にあると痛感し

て、自分のことを愛してくれる人物で、かつ、自分も心引かれる人物である、三好のことを頼りたい、三好によって救われたいという欲求が強くなるということ、の二つの要因に基づくものである。しかし、澄子の中で、山田が最も「可哀さう」な存在であることは動かし難く存在するために、三好に心引かれながらも、その気持ちが三好への本質的な愛へと変わることはない。澄子が山田に尽くそうとする結果、三好を裏切る行為を繰り返すのはそのためである。従って、こう解すると、(三)の見解のように、必ずしも澄子の心理が「不透明」であつたとも思われぬ。山田と三好の間を揺れ動く澄子の心理の内実は、極めて「情に脆い」とされる澄子の氣質から統一的に説明することができる。

六

では、こうした結論を受けて、三好の人物像の意味、三好と澄子の関係をどう捉えたらよいだろうか。まず、(一)の見解で解すると、理屈の上では、離れた後でも澄子との愛は続いていると信じる三好は、澄子との結び付きを正確に理解していたということになるはずである。しかしながら、述べてきたように、澄子の本質的な愛が三好に向

けられてはいない以上、三好の理解が完全に正しいものであったとはいえない。三好は、澄子の本質的な愛が結局は山田に向かう類のものであった、ということを知ることができなかった。

一方で、(二)の見解で解すると、三好の理解は単なるひとりよがりであった、ということになるはずである。実際(二)の見解は、三好の存在について次のように述べている。

澄子について、「山田君も捨てられないが僕の事も忘れられない」とか、「僕と云うものがあればこそ、澄子さんも思い切つて山田君を愛する心にもなれず」などという、一見思慮深そうな思ひ上がったセリフを、三好はしばしば口にしてゐる。その気障さや甘えをぬけぬけと言つて、羞じらう所のない男である。しかもそれが結局、皮肉にも澄子と売春的な肉体関係をもつにいたる喜劇的な役割を、演ずる羽目になるのである。

(野村尚吾氏の前掲書)

この直前の箇所では、三好には「独善的で高慢な不遜さ」があるとして、谷崎は三好に対して「手厳しい批判をあびせてゐる」とも指摘されている。つまり、(二)の見解は、澄子が三好に心引かれてゐる、という点を看過してゐるために、澄子と三好との間に心の通ひ合いが存在することは

なく、従つて、離れていても澄子との愛は続いていると信じる三好の考え方は、「思ひ上が」り以外の何物でもない」と解してゐるのである。しかしながら、述べてきたように、澄子には三好に心引かれる一面も確かにあった。それ故、三好の考え方が、単なるひとりよがりであったとは必ずしもいえない。三好はそうした澄子の一面に接していたからこそ、一貫して二人の愛は続いていると信じてきたものではなからうか。

以上のことから、三好の考え方は、三好にも心引かれるという澄子の一面を根拠としたものであるために、全く的外れであるとはいえないが、結局、澄子の愛のあり方を本質的には理解していないものであった、という結論を見通しとして持つことができる。今、三好の考え方が澄子の愛のあり方とは矛盾するものであった、という点については、既述の内容によつて明らかにされてゐると思われるので、以下では、三好の考え方は、三好にも心引かれるという澄子の感情に影響を受けてゐる、という点について具体的に確認して、三好の人物像の意味、三好と澄子の関係を整理しておきたい。

なるほど、(二)の見解が述べる通り、三好が「独善的」で、ひとりよがりな一面を持つてゐることは疑いない。澄子が三好の下を去つて、山田の所へ行った時、澄子は自分

を愛するが故に山田の所へ行つたのだ、などと三好が当初考えたのは、明らかに一方的な考え方である。しかし、三好が当初のそうした考え方を以後も一貫して持ち続けることになつたのは、澄子が三好に心引かれる気持ちを持つていたということ、そのことを三好も察知していたということ、によるだろう。三好は、澄子と離れた後でも澄子と接点を持つており、その中で、三好に心引かれる澄子の態度に接している。そこで、澄子は内心では自分のことを愛してくれているのだ、という当初の考え方の正しさを絶えず確認していたに違いない。それが、一見するとひとりよがりにも思える考え方に三好が固執することとなつた要因である。

そのことが分かるいくつかの例を挙げておこう。まず、澄子は、最初に三好の下を離れた後にも、三好に何度も手紙を出している。それは、澄子が三好と再会した時に、次のように三好に述べていることから分かる。

あんな手紙を度々差し上げたり何かして申訳ござい
ません。でも私は、ほんたうに、苦しかつたものです
から、

澄子は、山田の所に行つた後、自らの苦しさを何度も手紙で三好に訴えていたと分かる。加えて、これらの手紙には、三好のことを忘れることができない、という澄子の心境も

記されていた。そのことは、澄子の兄であり、三好の友人でもある圭之助が、三好に対して次のように述べていることから知ることができる。

山田と別れないくらゐなら、なぜキツパリと君（論者注——三好）を思ひ切らないのだ。（論者注——澄子が）「心では君を忘れずに居る」と云つたつて、そんな事が何になるのだ。それは君に対しても山田に対しても悪い事だ。

ここで、澄子が「心では」三好のことを「忘れずに居る」と述べたことを、なぜ圭之助が知っているのかというと、それは澄子が実際に三好にそう述べて、それを三好が圭之助に伝えたからである、としか考えられない。三好は澄子から、離れた後でも三好のことが忘れられないという気持ちを聞き、それを圭之助に伝えていたのである。従つて、澄子は三好の下を離れた後でも、山田の所にいることが苦しいということ、離れていても三好のことを忘れられないということ、を三好に繰り返し訴えていたといえる。

三好は、澄子のこうした態度に接さなければ、右記のひとりよがりな考え方を信じ続けることはなかつた。山田のことを捨てられないが、「心では」三好のことを「忘れずに居る」という澄子の態度を踏まえて、三好が次のように述べていることから、そのことは察せられる。

ほんたうに若し、澄子さんがもう少し情の強い人だったら、僕もこんなに迄思ひ迷はずにも済んだかと思ふ。それを思ふと、僕は澄子さんのあの優しさがつくづく恨めしいやうな気がする。なまじ僕の事なんか考へないで、きれいさつぱりとあきらめてくれたら、僕も今頃は疾うに忘れて居られたらうし、澄子さんだつてそんなに迄荒んでしまふ事はなかつたらう。

既述の通り、三好は、山田の所にいるのが苦しい、三好のことを忘れることができないという澄子の心境を絶えず聞かされていた。ここでは、そうした澄子の気持ちに接することがなければ、澄子のことを「今頃は疾うに忘れて居られた」と考える三好の心理が記されている。三好は、澄子と接点を持つ中で、澄子は内心では自分のことを愛してくれているのだ、という当初の考え方の正しさを確認する結果、澄子を忘れることができず、一層のめり込んでいくのである。

同様のことは、以後の展開の中にも存在する。例えば、澄子が二度目に三好の下を離れた際も、三好は澄子から、あなたのことを忘れられない、せめてお互いに死ぬ時くらいは顔を見たい、という内容の手紙を受け取っている。こうした手紙を受け取れば、三好でなくとも、澄子の愛は自分にあると感じるに違いない。さらに、決定的であるのは、

澄子が三好と関係を持つに至つたことである。勿論、これは山田に命じられて、三好から金を巻き上げるためになされた行為であることが後に判明する。しかし、三好は当然そのことを知らないものであるから、澄子と関係を持つに至つて、澄子は自分のことを愛してくれているのだということとをさらに確信したに違いない。

以上のことから、離れていても澄子との心は繋がっている、二人の愛は続いていると三好が信じるのは、決して三好の「思い上が」つた、ひとりよがりな性質のためだけではないと分かる。むしろ、澄子から届く手紙の内容によって、あるいは、実際に澄子と接することによって、澄子の愛は自分にあるという信念の正しさを絶えず確認していた。澄子との接点がなければ、三好はそうした信念を持ち続けることはなかつたのである。既述の通り、澄子は、三好に心引かれるという一面を持つものの、彼女の愛の重心が本質的に三好に移ることはない。一方、三好は、自分に心引かれるという澄子の一面に触れることによって、自らの信念の正しさを確認しながら、彼女の愛の重心が本質的に自分に移ることはないということを知ることができない。三好と澄子がこうした関係にある以上、三好が最後に決定的に裏切られるという結末を迎えなければならなかつたのは、ごく当然の成り行きであつたといえる。

三幕目に入るまでは、澄子と三好と山田の三角関係は、各々の特異な恋愛観によつて、危うい均衡を一応保つていた。ところが、三幕目に至つてこの均衡は破れ、三好が裏切られる形で結末を迎える。その経緯に関して、簡単に触れておく。既述の通り、澄子は山田に三好を客としてとるように命じられる。澄子は抵抗するものの、結局山田にいわれるがまま、三好と関係を結ぶ。三好は、澄子から一度だけ金を要求されて、澄子に金を渡したが、まさか自分が騙されているとは思ひもよらない。むしろ、三好にしてみれば、澄子は自分のことを愛しているのだ、ということをしるに確認したことだろう。結局、三好は、山田に隠れて澄子と関係を持つたことに罪を感じ、山田に謝罪すると同時に、澄子は自分のことを愛しているのだから、澄子を返して欲しいと山田に頼むに至る。そこで、三好は、山田と澄子とによつて騙されていたことを始めて知る。

いうまでもなく、均衡が破られることとなつた要因は、三好が澄子を返して欲しいと山田の所に頼みに行つたことにある。今まで、山田を愛そうと努める澄子の姿を見守つていただけの三好が、ここに至つて何故にそうした行動に

出たのであろうか。その点について、三好は次のように述べている。

どんな理由があつたにせよ、自分が愛して居るものを人に譲つたと云ふ事が悪かつたんです。(中略)僕はあなたを悪人だから可哀さうだ、不仕合はせだと云つてしまつて、その実自分も可哀さうな人間なのを忘れて居ました。(中略)僕は自分と云ふものを余り買ひ破り過ぎてみました、人を憐れむ余裕もないのに、生意気にもあなたを憐れまうとしました。(V)

三好はこれまで、山田を「可哀さう」であると感じる澄子の優しい「性質に同化」して、澄子と共に山田を憐れみ、その中で苦しみや悲しみを二人で共有しようと考えていた。そのことによつて、やがて二人の間に真の愛が成り立つと信じていた。しかし、ここに至つて、現在の自分は、山田に劣らず救いが必要な「可哀さう」な人間であると感じるようになる。それは、山田に隠れて澄子と肉體関係を持つ中で、澄子が自分の傍にいない不幸を改めて痛感したためである。その結果、三好は、「山田君、どうか僕等を哀れんで下さい、(中略)僕等の苦しみを察して下さい」と訴えて、澄子を返してほしいと山田に要求することとなる。

もつとも、こうした三好の感情は、この場面で突如とし

て芽生えたわけではなく、これより以前にその前兆はあった。澄子が二度目に三好の下を去った後、三好は既に澄子に次のような心境を語っていた。

山田君にしたつて、何もあなたの同情を買はうとか僕を負かさうと云ふ積りで、殊更悪人になつて居るのぢやないんだし、あゝ云ふ生れつきなんだと思へば、そりやほんたうに可哀さうです。あなたがあの人を見捨てゝ、自分ひとり善人になる訳に行かないと仰つしやるのは、そりやほんたうに無理ありません。(中略) 山田君も可哀さうだし、あなたも可哀さうだし、そして僕、だつて可哀さうだ、誰一人可哀さうでない者はないんだ。

三好はこの時既に、澄子や山田と同じく自分も「可哀さう」な状況にある、と感じていた。それは、「多勢の味方」にも見放され、おまけに澄子も傍にいないという現状の侘びしさを拭えずにいたからである。澄子と関係を持ち、その不幸を一層身に沁みて感じるようになることで、三好の感情は強められ、三好を行動に駆り立てるまでに至る。

ところで、(V)の言葉に見られる、三好の発想や行動の経路は、澄子のそれと全く等しい。澄子は嘗て、山田の所から三好の所へ逃げ出した時、次のように三好に語っていた。

もう私の愛の力ではとても山田を救ふことは出来ません、私こそ救つて貰はなかりやなりません、私は弱者なのでございます、人を憐れむ余裕はないのでございます、

この直前には、既述の通り、「可哀さうなのは山田よりも私でございます」、「何卒私を可哀さうだと思つて下さいまし」とも澄子は訴えている。山田を憐れみ救おうとしながら、自らの不幸に耐え難くなつた時、自分には「人を憐れむ余裕はない」と嘆き、自分の方こそ救つてもらいたい、憐れんでもらいたいと人に縋り付くという発想や行動は、澄子と三好とで共通している。

このことは、澄子も三好も共に「弱い」人間であるという点で共通の気質を持っていると、作品の中で強調されていることと関係しているだろう。次の二つの引用にそのことは示されている。

三好 (前略) ほんたうに僕は相手が悪かつたんだよ。

相手が澄子さんでなければ、もつとシツカリした強い女なら、僕も斯うまで女々しい男にならなかつたんだらうけれど、――

圭之助 ぢや、君も澄子の感化を受けたと云ふ訳だね。三好 感化を受けたのか、或はもと／＼さう云ふ性質があつたので、それで澄子さんを好きになつたの

か、まあどつちだか分らないが、(以下略)

澄子 そりや、あたしが此処に居る間は、やつて来ちや悪いと思ひながら、やつぱりやつて来るだらうと思ふわ。あの人(論者注——三好)だつて、あたしと同じやうに弱いんだから。

山田 ふん、さうだつけな、お前も彼奴も弱いのを売り物にしてるんだつけな、考へて見ると弱い人間は重宝なもんさ。

最初の引用に示されている通り、そもそも、三好は澄子への愛が昂じて「弱い」氣質になった。(あるいは、澄子と同じ「弱い」氣質を持つ故に澄子を愛するようになった、といいかえてもよい。)澄子を愛する三好は、正に澄子の「性質に同化」していたわけである。その結果、澄子が、自ら招いた現状に耐え切れなくなり、山田よりも自分が「可哀さう」な存在である、自分こそが救われたい、と希求したのと同じように、三好もまた、自ら招いた現状に耐え切れなくなった時、同様の発想をし、同様の行動をとることとなる。三好は、澄子の行動を跡付けるかのようにな、「可哀さう」な自分の苦しさを訴えて、憐れみを請う。しかしながら、澄子が、三好を頼ることができたのとは異なり、澄子と山田が切り離し難く結びついた中であつて、三好が

結局誰を頼ることもできないのは明らかである。澄子の「性質に同化」していた三好は、自ずから澄子と同様の発想や行動をとることとなつたわけであるが、皮肉にもそのために、澄子や山田に欺かれていたという現実を突きつけられることになつたのである。

八

以上のようにこの作品を理解すると、従来考えられていた以上に、人物の心理や作品の展開の必然性は強まるように思われる。例えば、(一)の見解で解すると、澄子は、愛する三好を繰り返し裏切つてまで、愛してもいない山田を愛そうと努力していたということになり、それでは澄子の心理の必然性はどうしても乏しいと感ぜられる。かつ、そう解すると、三好を愛する澄子の気持ちと、山田を愛さなければならぬと考える澄子の気持ちとの間に何の繋がりも見出せず、両者に対する澄子の感情を統一的に説明することができなくなる。また、(二)の見解で解すると、まず、澄子が三好に心引かれていた理由が不明である。さらに、三好が、離れていても澄子との心は繋がっていると信じる理由が、三好の「思ひ上が」つた性質のためだけであつたということになり、根拠が希薄になるように思われ

る。三好が、単に「思ひ上が」った性質を持つ、「喜劇的」人物であるに過ぎないのであれば、澄子の三好に対する思慕の情が描かれる必要はない。

それに対して、澄子は「可哀さう」という感情によって揺れ動く存在であると捉えることで、澄子が、山田を愛さなければならぬと考える一方で、三好にも心引かれる理由は明確になる。同時に、そのことによつて、澄子と三好の関係もはっきりとするので、三好が一貫して、澄子の愛は自分にあると信じていることができた理由も判然とする。その結果、三好と澄子の発想や行動も、各々の人物像に由来した一貫性・必然性を有するものであつたということが分かる。

こうして見てくると、この作品が、山田と三好と澄子という特異な性質を持つ三者の心理の交錯によつて、筋の展開が必然的に結末へと導かれていく、緊密な構造を備えた作品として造形されていた、と見通すことができる。山田が生来の「犯罪的素質」を持った人物であるということ、三好が苦境の中で一貫して澄子を愛し続ける人物であるということ、この二点のために、澄子の気持ちは、「可哀さう」という感情を軸に不安定に揺れ動く。三好は、澄子のその感情に接することによつて、澄子の真の愛は自分にあるという自らの信念の正しさを確認する。こうして、三者

の関係は危うい均衡を保っていた。しかし、いくら三好にそうした信念があるとはいへ、澄子が山田の側に変わらざる以上、最も苦しい状況にあるのは三好である。澄子と同じ「弱い」氣質を持つ三好が行動に出るということは必然的である。だが、澄子の本質的な愛が三好に向かうことはないために、結局三好は裏切られる結果となる。作品は、一人の人物像から派生する必然的な発想や行動が、別の人物に影響を及ぼすことで新たな展開を導き、それらが組み合わされて一つの結末へと自然な形で収束していく。しかも、三好が澄子の愛は自分にあると信じざるを得ない状況を巧みに積み重ねて描いているために、三者の愛の関係がどう展開していくのかと読者はいやおうなく興味を駆り立てられる。その結果、三好が始めて事の真相を知るといふ最後の結末は、劇的な効果を生む。

恐らく、谷崎は、この作品を形作るにあたり、憎からず思う男女が売春的な肉体関係を持ち、最後に男が裏切られてしまう、という劇的な結末を自然に導くために、三者の心理を組み合わせ、各々の場面を組み立てて、漸進的に話を進展させていく、という点に最も力点を置いていたと推察される。実際、「愛すればこそ」の上演（大12・3「新演芸」）において、三幕からなるこの作品の中で「序幕は、だら／＼長くなつてしま」つたが、「あとの二幕は、あれ

だけでも纏つてゐる」と記している。既述の通り、この作品は極めて構造的に作られている。しかし、谷崎は、序幕があるために、この作品が未だ完全な構造を備えているとは考えていない。やや冗漫になつてしまつた序幕を反省するこの言葉からは、かえつて、この作品が、作品の流れの上で不要なものを極力排除し、無駄をなくすという意図のもとで造形されていた、ということを知ることができる。この作品の中で志向された方向性は、無駄を削ぎ落とした緊密な構造を備えた作品である。

このことは、比較的近い時期に記された「芸術一家言」（大9・4、5、7、10「改造」という評論で、漱石の「明暗」の構造が「うその組み立て」であることを批判しつつ、作品における「組み立て」の意義を次のように述べていることと、密接に関わつてゐる。

凡て完全なる組み立てと云へば、一部分の糸を引けば全体へさし響くやうな、脈絡あり照応あるものでなければならぬ。一局部を壊せば全体が壊れてしまふほど密接な関係で、部分々々がシツカリと抱き合つて居なければならぬ。

勿論、この一節は、作品を徒に複雑にするということを意味しているわけではない。登場人物の性格や心理の必然性から、出来事が自然に発展していくことが求められ

ている。先の記述の後には、「明暗」に登場する人物の行為を「まどろっこし」と批判しつつ、谷崎は次のように記している。

斯くの如きまどろっこしさは、それが彼等の性格から来る必然の経路と云ふよりも、たゞ徒に事柄をこんがらかして話を長く引つ張らうとする作者の都合から、得手勝手に組み合わせられたものとしか思はれないのである。

谷崎は、漱石が「徒に事柄をこんがらかして話を長く引つ張らうと」したために、「明暗」の構造が「うその組み立て」になつてしまつたと批判しつつ、作品には真の意味での「組み立て」が求められると主張している。ここでの言葉は、「明暗」批判の意図のみならず、「多くの人に「自らの「芸術観を訴える」という意図もある、と谷崎は述べている。従つて、この時期の谷崎が、「性格から来る必然の経路」によつて、「一局部を壊せば全体が壊れてしまふほど密接な関係で、部分々々がシツカリと抱き合つ」た作品を造形することを理想としていた、ということが分かる。

これは、「愛すればこそ」の中で志向された方向性と軌を一にしている。作品のあらゆる細部が必然性の連鎖で結び付き、全体との間で有機的な関連性を持つ、緊密な構造を備えた作品を造形すること、こうした当時の谷崎の理想

が、この作品には貫かれている^(註)。

九

しかしながら、一方で、この作品では、作品の構造や規則性が先行し、人物や場面は全体に奉仕するための単なる道具となってしまうという印象も残る。そのため、巧みな筋立てを支える内容は、未だ通俗的な情痴話の域を出ていないように感じられる。この作品の中で、一体谷崎は何を目指していたのであろうか。いうまでもなく、作品には、善——三好、悪——山田、愛——澄子という異なる三つの性格が描かれている。澄子は、三好と山田の間を揺れ動きながら、結局は山田の側に付く人物であるので、この作品の対立軸は「善」と「悪」ということになる。従って、この作品の眼目は、この時期の谷崎文学に頻出する「善」と「悪」の対立の問題であり、澄子が山田に付くことで、「善」が「悪」に敗れるという構図をとっている。尤も、「善」と「悪」の「矛盾する二つの心」はいつもたんに「対立照応」されるだけで本当の「闘ひ」がその間に行はれることはありません。(中村光夫『谷崎潤一郎論』(昭58・9))と記されていることが、この作品においても該当する。善——三好、悪——山田という型が固定

されているので、両者はごく単調な性質を持つに留まり、「善」と「悪」の葛藤から、その心理が深められていくとはならない。例えば、山田は、「悪人であるからと言って、平然と特権の如く横柄な顔をして悪を行う底の人物」(佐藤春夫「秋風一夕話」(大13・10、12「随筆」))であるため、「善」に忤ることに対する罪悪感を抱えつつ、それでも「悪」に赴かざるを得ない、などという深刻な苦悩を全く持たない^(註)。しかも、その「悪」の内容たるや、詐欺を働いたり、澄子に売春をさせたり、と極めて卑俗なものであるに過ぎない。また、三好も、圭之助に「人生を弄」んでいると批判される軽薄さを持ち、「善」を真摯に追求する人物であるとは到底いえない。実際、最後に三好の偽善性は露になる。こうした表面的な「善」と「悪」が固定化されたまま、「対立照応」されているだけである時、そこに真の意味での「闘ひ」や葛藤が見出せないのは当然のことである。

このことは、「父となりて」(大5・5「中央公論」という随筆で述べられる、谷崎の次のような事情が影響しているだろう。

私に取つて、第一が芸術、第二が生活であつた。初めは出来るだけ生活を芸術と一致させ、若しくは芸術に隷属させようと努めて見た。私が「刺青」を書き、「捨

てられるまで」を書き、「饒太郎」を書いた時分には、
其れが可能な事であるやうに思はれて居た。又或る程
度まで、私は私の病的な官能生活を、極めて秘密に実
行して居た。やがて私は、自分の生活と芸術との間に
見逃し難いギャップがあると感じた時、せめては生活
を芸術の為に有益に費消しようとして企てた。(中略)
斯くの如くにして、未だに私は生活よりも芸術を先に
立てゝ居る。たゞ今日では、此の二つが軽重の差こそ
あれ、一時全く別々に分れてしまつて居る。私の心が
芸術を想ふ時、私は悪魔の美に憧れる。私の眼が生活
を振り向く時、私は人道の警鐘に脅かされる。臆病で
横着な私は、動もすると此矛盾した二つの心の争闘を
続けて行く事が出来ないで、今迄屢々側路へ外れた。
嘗ての谷崎は、「芸術」と「生活」の一致を信じてことが
できた。しかし、「饒太郎」を書いた大正三年頃以降から、
「芸術」と「生活」の方向は「全く別々に分れてしまつて
居る。」そのため、「芸術」と「生活」、あるいは「善」と
「善」という「矛盾した二つの心の争闘を続けて行く事が
出来」ず、むしろ、それを回避せざるを得ない状況に陥る。
この「父となりて」の述懐は、大正五年のものであるが、
「愛すればこそ」が書かれた大正十年の段階にあつても、
谷崎がこの矛盾を抱えたままであつたことは間違いない

(六)。「愛すればこそ」において、「善」と「悪」の真摯な
「闘ひ」や摩擦を形象化することができず、人物の内面を
掘り下げ、抉剔することができなかったのは、谷崎のこ
うした状況のためである。

その意味で、谷崎は、この作品において、「善」と「悪」
という「矛盾した二つの心」の問題を突き詰めて追求しよ
うとしていたわけではない。むしろ、それは作品の素材で
あり、その素材を組み合わせて面白い筋を展開していくこ
とを志向していたのではない。実際、既述の通り、この作品
は、憎からず思う男女が売春的な肉体関係を持ち、最後に
男が裏切られてしまうという、過激で通俗的な結末を自然
に導くために、緻密に組み立てられた作品である。いうま
でもなく、美人局という犯罪は、当時の三面記事をしばし
ば騒がせる話題で、その事件自体が読者を引きつける力を
持っている。こうした通俗的興味を掻き立てる結末を導く
ために、作品の構想を綿密に練り、それを緻密に組み立て
るといふ谷崎の意識は、自己の煩悶と対峙し、それを人物
に内面化するという方向ではなく、筋の面白さを追求する
という方向に傾いている(七)。ここに、谷崎の切迫した感
情や情緒を見出すことは難しい。

芥川龍之介は、「文芸的な、余りに文芸的な」(昭2・
4〜6、8「改造」)の二で、「愛すればこそ」の谷崎氏

は不幸にも詩人には遠いものである。」と述べて、この作品を批判している。晩年の芥川が希求していた「詩的精神」が、先入観に惑わされずに、生活現実を凝視することで、芸術家に固有の現実感や実感を表そうとする精神であったということとは以前に述べた⁵⁵。この作品は、右記の通り、類型的な「善」と「悪」、あるいは「愛」の概念を緻密に組み立てて、筋の面白さをもつばら追求した作品、通俗的興味に満たされ、作者の切迫した感情が見出し難い作品、であるのだから、これが当時の芥川の芸術観と全く相容れないものであるということは納得できる。芥川は、「文芸的な、余りに文芸的な」の五で、「谷崎潤一郎氏の悪魔主義」は「道徳的魂の苦痛」から生まれてきたはずのものである、とも記している。この作品に描かれる、そうした「苦痛」の伴わない「悪」の中に、谷崎自身の抜き差しならぬ実感を窺うことは確かにできない。

尤も、この種の作品が、芥川の批判するように、芸術的な価値を全く持たないものであるのか否かということ、を、断定することはできない。それは、小説における芸術的な価値をどう位置付けるのかということによって変わってくる問題である。しかし、この作品の良否の判断は措くとして、「善」と「悪」という単純な二項対立を組み合わせたこの種の作品の傾向が、従来の型から大きく踏み出せない、

作品の固定化をこの時期の谷崎にもたらしているという一面は否定できない。周知の通り、「前科者」(大7・2・21) 3・19 「読売新聞」(二人の稚児)(大7・4 「中央公論」)、「金と銀」(大7・5 「黒潮」, 大7・7 「中央公論」)、「鮫人」(大9・1, 3) 5, 8) 10 「中央公論」)、「AとBの話」(大10・8 「改造」)などで、「善」と「悪」、あるいは「生活」と「芸術」の二項対立の問題が、一種の紋切り型として繰り返されている。このことは、やはり谷崎にとつて停滞であるといわなければならない。

この停滞の要因は、既述の通り谷崎が、そうした二項の矛盾と向き合い、それを真に闘わせることができなかつたことにある。谷崎にとつて、その矛盾を解消し、「芸術」に昇華されるべき「生活」の基盤を持つことの意義は殊の外大きいように思われる。その意味で、谷崎文学の真の成熟は、やはり、関西移住によつて、関西の「生活」の中から自ずと喚起される豊饒な古典的世界を、徐々に獲得するようになるまで待たなければならなかつたのではないだろうか。

(注)

(一) 遠藤郁子「谷崎潤一郎『愛すればこそ』——ベストセラ―化を探る」(『続・谷崎潤一郎作品の諸相』所収) 参照。

(二) ただし、(一)の見解は、その点についてはつきりと言及しているわけではない。

(三) 笠原伸夫『谷崎潤一郎論——宿命のエロス』(昭55・6)のV章「小田原事件前後」(二)「も、三好の存在を「善ゆえの間抜けぶりがあらわである。」と述べ、その点のみを強調している。

(四) 勿論、この作品は戯曲であるので、小説よりも構造的に造形し得るという事情もそこにはあるだろう。

(五) 物語の最後では、秀子と別れてほしいと懇願する澄子に対して、山田は「きつとそのうちに切れてやる、己あ先から秀子よりかお前の方が可愛いんだ、己にやたら悪い癖があるもんだから、……どうかしてお前の力で其の癖を直してくれ」と述べて、涙を流している。ここには、山田の人間らしい感情を窺うことができる。しかし、ここでも山田が「善」と「悪」の葛藤から、自らの苦悩を深めていくということはない。

(六) 谷崎は、「生活」と「芸術」の溝を意識し始めることで、

本論で触れたような、「生活」と「芸術」、あるいは「善」と「悪」という二項対立を前面に押し出した作品を形作るようになる。こうした作品は、「愛すればこそ」以降も書かれ続けるので、「愛すればこそ」の時期にもまだ「善」と「悪」の矛盾という課題が谷崎の問題意識としてあったと判断される。

(七) 周知の通り、この作品には、谷崎と千代夫人と佐藤春夫の三角関係を巡る事件、いわゆる小田原事件が幾分か影を落としていた。小田原事件にまつわる煩悶を、述べてきたような作風に仕立てて造形することの中に、この作品の志向した方向性が窺われる。

(八) 拙稿「芥川龍之介と「詩的精神」」(平18・1「国語国文」)参照。

(たぐざり かずま・本学文学研究科博士後期課程、

京都学園大学非常勤講師)